

詩3ッ 露古

カッコウは

あなたは振り返る
目に濃い紫の影がある
もう間に合わない
カッコウは

蟻とかざぐるま

スカートのすそを抑えて座った
日はすでに傾いて手に持っているかざぐるまに惰性の風が来る
笑うでもなく笑った
蟻がいる
どうしようもなく蟻がいる
ああ今日はどんな日だったろう
贅沢な感想がほろほろと朽木のかげらのように剥がれ落ちる
足の指に蟻がいる
蟻らしい蟻がいる
もう少し奥まで行ってみよう
今日は気分がいい
それになんとか極上な人間になったような気がして胸がぞわっとする
優秀な蟻たちは私を手なずけてどこまでも行ってしまう
根を螺旋に張って身を振る木に引き戻される
かりかりとこめかみを搔くのは蟻の足
さもしく硬い眼球にぴしりと空が落ちた
蟻がいる
黒く黒く

そして風はかざぐるまの中に

鳴くよ

あそこで鳥が鳴くよ

しゃがれて(しゃれて?)

羽根を透かして日を見るのさ

目をやられるからね

十遍透かして(ジッペンスカシテ)

百遍透かして(ヒャッペンスカシテ)

そうら巧くやれよ

千遍万遍

きっと恋をするってさ